
猫と鴉

黒轍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫と鴉

【Nコード】

N2815F

【作者名】

黒轍

【あらすじ】

裏切りやら因縁やら友情やら。複雑な過去を持つ門珈は、入学して一ヶ月も経っていないというのに、いきなり親の都合で転校させられる。しかも転入先レイルス学院は今「激動の時代」だとか。片や馬鹿率いる「猫」。片や活字中毒率いる「鴉」。様々な組織の入り乱れる学園でのお話。

第一部／序章：破壊の電波（前書き）

手探り&燕かなりあ優先で書いているので亀足な予感です。

第一部／序章：破壊の電波

「あれ？帰って来てたの？はるな」

風呂から戻ってきて早々、清水門珈しみずもかは呟いた。

二段ベッドで分断された六畳間は、電気を消したはずなのに明るく、鍵もかけたはずなのにかかっていたいなかった。

左側の空間で勉強らしきものをしていた少女が振り返る。

強くパーマをかけた黒髪、一見きつそうな緑色の目。

やっぱりルームメイトの風間遥南かざまはるなだ。

今日は中学のときの友達の家に泊まりに行くと言っていたのに、どうしてだろう。

不思議そうに見ていると、遥南はにやりと笑んだ。

「もかが寂しがるから」

一瞬はるなに抱きつきたくなる衝動に駆られた。

でもそんなものは無視して、門珈は笑う。

「はは、ばーか」

合わせてはるなもけらけらと笑った。

どこまで知っているのかわからないその態度に、どうしようもなく救われた。

足を上げて靴を脱いで、裸足で右側の空間に進んだ。

机の上で黒い携帯電話のライトが、派手なデコレーションを避けて点滅している。

タイミング良く、右側からも声がかかった。

「携帯、ずっと鳴ってたよ」

「そう？」

「おまえその着メロまじやめてくんない？煩すぎ」

「やだよ。これはあたしの魂デス」

「おまえの魂うるせえ」

「うわ、何かむちゃあたし自身を否定された気分」

軽口を叩き合いながらも、ぱこりと携帯を開いた。

げー。

声には出さずに呻く。

着信履歴には「母」の文字。

やだな。どうせまた小言だよ。

でもあたしこの学校入ってから、そんな目立ったことしてないんだけどな。

母が自分に電話をかけてきたら、まず悪いことに決まってる。
正直、かけたくない。

でもかけなかったとして、また向こうからかかってくるだけである。

それすら無視したら？

そうしたら自分は、今度こそ本当に見捨てられるかもしれない。

仕送りを止められることだけは避けたかった。

向こう側の遥南に聞こえないよう、小さく息を吐いた。

そしてベッドの下段に、仰向けにして寝転がる。

下段にだけは、遥南側にカーテンがしてあって、見えないようになつていた。とは言つても二人を隔てるのは布一枚。声は丸聞こえだろう。

まあいいや、と、あらゆることに観念した門珈は、投げやりに発信ボタンを押した。

5コール程で、相手に繋がる。

『もしもし?』

ぶつきらばうで、苛立つような女声。

途端に電源を切りたくなる。

でもこっちはこっちで、精一杯の虚勢を張ってやるつもりだった。相手を真似して、最大限にぶつきらばうな声で応答してやる。

「何か用?」

声が震えたのは、ばれたかな。

しかしそんなちっぽけな門珈の虚勢は、次の瞬間脆く崩れ去った。躊躇うことなく、門珈に覚悟する余裕を与える隙なく、電波は音を突き刺す。

『あんた、転校することになったから』

第一章：激動の学院

理由も特に告げられないまま、ただ三日後レイルズ学院に転校だと、そう言われた。資料は後で送る、とも。

でも資料に目を通したときぴんときた。

「全寮制」「七年制」の文字に。

それはつまり、七年間は放置しておけるということだ。そして七年経ったときは、門珈もいい加減自立していい時期だ。こうして関わりを断つことができる、とも考えたのだろう。

そんなことで転校まで、と、普通の人なら疑問に思つかもしいい。

でも、あの母親ならば有り得るのだ。

そうになると、昨日の電話は、もしかしたら母親と言葉を交わす最後の機会だったのかもしれない。

無論、残念だなどとは欠片も思わない。

でも、転校はやっぱりやだなあ。

前の学校では、門珈もそれなりに上手くやっていけてたし、大した問題も起こさず、平穩に暮らしていたのだ。遥南のような貴重な友達も何人かできていた。折角仲良くなれた友人と早々に別れるのは、やっぱり辛い。

それに、である。

転入先の学校には、門珈の天敵がいるのである。

折角母の縁が切れたかもしれないのに、敵の縁のほうはまた繋がってしまった。

母の縁と敵の縁、どっちかひとつ切れるとしたら、自分はどちらを選ぶだろう。

そんな不毛なことを考えて、結局不毛なことだと結論づけた。

小さく息を吐くと、目の前にそびえる校舎郡に目をやった。
平坦な土地に美しく生い茂る林の中、それは一つの都市のように存在している。

いや、実際「都市」というのも間違っではないだろう。学級は一学年につき二十程あり、校舎も一学年ごとに分かれている、と資料には書いてあった。学院内には商店街などもあるらしい。

前居た学校も小さくはなかったが、クラス数はここの半分くらいだったし、全寮制ではなかったし、そもそも普通の高等学校だったので三学年までしかなかった。

驚きといえば、こんな辺境の地に建てられているのにも驚きだ。
何せ近くの小さな街「柏」^{かしわ}を出て、バスで三十分だ。林に入ってから十五分、一件の建物も見えていない。

しかしこれについては理由があった。

このレイルズ学院は、二つの国「クラウドニア王国」と、「白鷺^{しらぬぎ}自由部族国家」の平和の象徴として存在している（ちなみに門珈は白鷺の出である）。

とはいっても公立ではなく、立派な私立である。高名な科学者ハルディ・レイルズ氏と、その妻・若崎^{わかざき}奏氏が創立したらしい。

そして両国の和平を強調するため、二つの国の境界線の真上周辺の土地を買い、そこに建てたのだ。

だからこんなに何も無いところに建っているのだと、資料は示していた。

ちなみに両国から、またあらゆる部族・人種から平均的に生徒を取っている、という点でも、国際的関係を強調しているらしい。

そういう面で言えば、門珈は少し安心していった。

色々なところから生徒を取っているのだから、門珈の属する東風^{とうふう}族の生徒も、自然と数が限られてくる。

前の学校は普通に東風族公立だった。それはつまり、ほぼ皆が門珈の中学時代を知っていることを意味する。

避けられたり、敵意を持たれたり、なかなか友達ができなかったり。

それでも結構苦勞していたのだ。

だから、だいじょぶ。前よりは状況がましじゃんか、清水門珈。そう思うことにして、自分を励ます。ぱしりと頬を叩くと、門珈は意を決して校門へ歩き出した。

がらごととトランクを転がしながら、門を抜ける。

その直後、後ろから声がした。

「清水門珈さん？」

爽やかな青年の声に呼び止められ、振り返る。

黒いスーツを着た、眼鏡の男が立っていた。

見慣れない恰好である。

音族の男の服に似ているが、何となく大人し過ぎる気もする。もしかしてクラウドディアの人だろうか。

勿論門珈はこんな人間知らない。

門珈が不思議そうに突っ立っていると、男のほうから近付いてきた。

「清水さん、ですよ」

上品で綺麗な物腰だ。

「あ、はい」

肯定の返事に、男の銀色の目が細まり、微笑んだ。

目と同色の髪が風になびく。

綺麗な人だなあ、と心の中で呟いた。

でも女性的な美しさではなく、女の子達がきゃーきゃー騒ぐところの「かっこいい人」にも当てはまる。

要は、門珈の第一印象は、「何かモテそう」だったということである。

男は穏やかに会釈した。

「初めまして。ソラと申します」

ソラ？

姓はないのだろうか。

だとしたら十六夜族いそよひという可能性もある。

でも十六夜族の人は日光が苦手だったはず。

特に重装備というわけでもないし、こんな悠長に、青空の下、身を晒してていいのかなあ。

心配そうにソラの服を見てみると、彼は苦笑した。

「このような服を見るのは初めてですか？」

「んー、似たようなのは見たことあるけど、まあ初めてかも」

そうでしたか、と頷くソラ。

「俺はアルバートの民です。中学はコイルのほうに行っていました
が」

『アルバート』、『コイル』……。聞いたことはある。やはり彼はクラウディアの人間だったらしい。

「今日はあなたを寮まで案内するよう、頼まれてるんです。ちなみに同じ七組の者ですよ。よろしくお願いします」

「あ、うん、よろしくっ」

同じクラスだと聞かされて、門珈は元氣良く頭を下げた。

ほら、第一印象って大事だし。

それにしても、もっと年上の人間だと思っていた。こんな人が同い年だなんて、世の中って広いなあ。

「荷物、お持ちしましょうか？」

わお、紳土的。

「うっん、だいじょぶ」

「そうですか、じゃあ鴉寮……元い女子寮に案内しますので、付いて来てください」

……何か今聞き慣れない単語が混じったような……。

「からすりようっ」

苦笑するソラ。

「まあ、どちらにせよ説明するつもりでしたがね。清水さん、この学校について、猫と鴉の話はお聞きになりましたか？」

首を横に振る。

見学に来る暇すら無かったのだ。

持っている情報といえば資料にあった基礎的なものだけだし、猫や鴉なんて文字は全く記憶にない。

ソラは微笑んだまま言った。

「今、この学校は激動の時代なんですよ」

言っている意味が全くわからない。

「あるところに二人の男子生徒がいましたね。一人はアザウェイ、もう一人はゼブラといいます」

随分と話がよく飛ぶなあ。

門珈は半ば呆れながらも、黙って聞いていた。

「二人は寮で同じ部屋になったんですが、これが物凄く相性の悪い二人組でして。ついに喧嘩勃発。アザウェイは思いました。『あいつは敵だ』と。そこで彼は打倒ゼブラを目標とする集団『猫』を作りました」

何だか段々話がおかしい方向に向かっている。

「わりと人は集まったんです。彼の友人にはリーダーも何人かいましたから」

『リーダー』とは、一つの部族、または民の代表である。代表どうしで話し合いや交流の機会などを設けて、それぞれのグループの親睦を図るのが目的らしい。

「でもそうなるってゼブラも黙ってはいませんでした。彼は宣言しました。『猫』以外の人間を『鴉』とする、と」
「せこつ」

思わず言ってしまった言葉に、はっとして口をつぐむ。
ソラがこつちを見てにやりと笑った。

「そう、せこい方法です。でも、確かに効果的ではありました。鴉に属することを嫌い、猫に入る生徒もいましたが、結果的には大勢の者が鴉につきました。そもそも猫はあまり素行の良くない者が結構いましてね、それに反感を持つ生徒は喜んで鴉につく程です。こうしてレイルズ学院の一年は、今真つ二つに分かれているんです。それに伴い寮も分かれました。元々相性の悪い二人が相部屋になったのが原因ですからね。今では男子寮を猫が、女子寮を鴉が使うようになっていきます。鴉のほうは人数も多いですし、微妙に男子寮も使ってますが」

「へ、へー」

何か、そこはかたなくデジャ・ヴュが。

「清水さんの中学に、状況は似ているかもしれませんね」

咳き込んだ。

とりあえず気を落ち着ける。

「な、なして？」

「鷹組といた……」

「ストップストップストーーーーッブ!!」

みなまで言わせず、叫んだ。

「何で君がそれ知ってんの！？クラウドディア人なんでしょ!？」

ソラは門珈の剣幕にも気圧されることなく、穏やかなま言う。

「俺の知り合いに、あなたのことをよく知っている人物がいるんです」

その言葉に寒気を感じたが、それが誰なのか聞く勇氣はなかった。
どーかどーかあたしの想像している人間じゃありませんよーにつ！

「もしかして東風族以外のみんなも、あたしのこと知ってたりする？」

恐る恐る聞いてみた。

「知っている人はいるでしょうけど、少数でしょうね」

ほっとして肩を降ろした。

本当に良かった。

それにしても、自分の過去を知ってもこうして気にせず接してくれているのだから、きつとこの人も悪い人ではないんだろう。

しかし門珈が少し気を許しかけた途端、ソラは振り向いてこう言った。

「そんな清水さんだからこそ、折り入って相談があるんです」

僅かに身構える門珈。

ま、まさか気に入らない先公を飛ばしてくれだとか金曜日を休みにしてくれだとか言うんじゃないでしょうね。

「実は東風族には、リーダーがまだいないんです」

少しずれている門珈の思考とは裏腹に、ソラは説明を始める。

「リーダーの決め方は部族、人種ごとに違うんですが、東風族の場合は立候補した生徒に反対な場合は、反対票を入れ、特に異論がない場合は何もしないという方法だったんですね」

うわ、東風族やる気ねー。まあらしいっちゃらしいけど。

「それで、今回立候補したのは一人だったんです。しかし、反対票の数が多すぎました。反対票が三分の一以上あつては駄目なんですよ。こうしてその生徒は不信任となりました。誰かわかりますか？」

手を振り頭を振り、全身で否定を主張した。

「いや、知らんです。教えてくれなくてもイイデス」

ソラは苦笑して続ける。

「それ以降立候補は上がりず、今に至っているというわけです。生徒会のほうでもそろそろ対策を考えねばと思っていたところなんですけどね。俺一年の副会長なんですよ」

「あ、そうなんだ」

生徒会にあまり良い思い出の無い門珈には、曖昧に笑うことしかできなかった。

「で、そんなとき、あなたが来ることになった」

ふいに立ち止まったソラは、改めて門珈に向き直り、つられて門珈も立ち止まった。

「清水さん。猫に入って東風族のリーダーになってくれませんか？」

第二章：決意と衝撃

少なからず驚いた。

「君、猫なの？」

ええ、と、ソラは頷く。

「さらに言えば猫の幹部で、アルバートの民のリーダーです」

副会長で幹部でリーダー。何だか凄い人に捕まってしまった。

「別に猫という組織そのものが、荒くれ集団というわけではありませんよ。ただ、少し困った方が比較的多いということですね」

「幹部とか、あるんだ」

「はい。猫は団長が一人、幹部が三人。鴉は頭領一人に幹部四人で成り立ってます」

「へー。『頭領』のほうが何かかっこいいね」

ソラは小さく笑う。

「アザウェイも悔しがってました。今更真似もできないみたいですけど。幹部の人数も、あなたが入ってリーダーになってくれれば四人になるんですけどね」

言って再び歩き出したので、門珈もそれに倣う。

「幹部って、リーダーがなるものなの？」

「そういうわけでもありませんよ。結果的にリーダーの場合が多く

はありますがね。ただ、あなたがリーダーになった暁には、幹部入りは確実でしょうということです」

ふうん、と相槌を打っておく。

何にせよ、門珈にとつては気乗りのしない話であった。

何が一番イヤかといえば、結局誰かの下につかなければいけない、ということである。

猫じゃなければ鴉、鴉じゃなければ猫。

うーん、微妙な学校に来ちゃったかも。

幹部になろうがリーダーになろうが、最終的には団長と頭領という二人がいる。それは門珈にとって、あまり気持ちの良いものではなかった。

こういうときにはあれかな、「下克上」ってやつ。

「焦って考えるものでもありませんけど、是非頭の隅にはとどめていただきたいものです。ああでも、猫になるか鴉になるかは早急に決めたほうがいいと思いますよ」

思い切って門珈は言った。

「ねえ、それ以外はないの？」

「それ以外？」

不思議そうなソラの声。

「猫でもなく、鴉でもない、それ以外」

僅かな沈黙が流れる。

聞こえなかったのかとも思い、言い直そうかどうか迷っていると、涼しげなソラの声がするすると耳に入ってきた。

「面白いことを言いますね。ですが……」

ソラはこちらを見ることなく続ける。

「そのときは相手になりますよ、俺が」

その言葉に言い知れぬ悪寒を感じて、門珈はこの学校に来てしまったことを盛大に後悔し出した。

規則的に並んだ扉を、ちらちらと確認しながら進む。

鴉寮の二階。探しているのは219の文字だ。

学校側としてはやはり一応女子寮男子寮として扱っているようで、そうになると門珈がまず鴉寮になるのは当然のことだった。

ソラとは寮の前で別れた。猫のソラが入ることはできないらしい。

寮に入ってから上履きらしく、門珈はとりあえずそこら辺にあったスリッパを履いている。

寮内に人気はあまりなく、二階に入ってから誰にも会っていない。ただ部屋の中からは時々声が聞こえた。誰もいないというわけではなさそうだ。

それでも静かな空間にはスリッパの床を擦る音がやけに大きく感じられ、まるで世界に一人だけのような気分だ。思ってしまった、門珈は身を震わせた。

やがてひとつの扉の前で立ち止まった。

赤紫色のドアには、金色で219と書いてある。間違いない。

確か門珈は、もう一人の女生徒と相部屋のはずだ。

門珈は誰かがいてくれることを願いつつ、ドアをノックした。
向こう側から「はい」と声がした。
ひとまず安堵する。

扉を開けて姿を現したのは、賢そうな緑色の目を持つ少女だった。
透けるような白金髪は一ヶ所だけ編まれ、羽飾りがついている。
着ているのは裾に刺繍が施された赤いドレープワンピース。羽飾り
も刺繍も、水夫族の典型的なファッションだ。

「あ、えと、初めまして。今日からこの部屋に住まわせていただく、
清水門珈です」

少女は愛らしく微笑んだ。

「わたしは飛場史弦^{おとばしげん}。よろしく」

つられて門珈も笑顔になる。

二人の間には、暫くほんわかとした空気が流れた。

ふいに、史弦が門珈の黒地に白い水玉柄のトランクを指差す。

「あなたの荷物はそれだけなの？」

「あ、ううん。残りは明日来るの。急な転校だったから、凄いはた
ばたしちゃってて」

そうなんだ、と史弦は頷く。

そして体を横にして、門珈が入れるようにしてくれた。

「とりあえず上がんなさいよ。こんなところで立ち話も何だし」

「あ、うん、ありがと。お邪魔しまーす」

広さも配置も、前の学校とほぼ変わらない。六畳くらいの空間を、二段ベッドが分断している形だ。

「今はわたしが右のほうとベッドの下使ってるんだけど、嫌だったら言つて。わたしは別にどっちでもいいから」

「あたしも気にしないからだいじょぶだよ」

明るく言つて、門珈は左のほうに進んだ。

「あ、ていつか……」

はたと史弦が口に手を当てる。

「もしかして、さつさと引つ越す予定があつたりする？」

目を瞬^{しばた}かせる門珈。

「え？ なして？」

「あ、えっと、鴉と猫の話は聞いた？」

そう問われて、理解する。

確かに自分が猫になつたなら、早々に引つ越すことになるだろう。

「引つ越す気は、今のところ無いかな」

「あら、そうなの」

そう言う史弦の態度は少し驚いているふうではあったが、別段何とも思っていないようだ。彼女は、猫になろうとはしなかった故に、最終的に鴉^{たぐい}になつた類なのかもしれない。

しかし次の史弦の言葉に、門珈は彼女の性格がわからなくなる。

「あたし的に言わせてもらうと、猫をお勧めしておくわ」

自らの耳を疑う門珈。

「へ？何で？」

史弦は鴉なのに、何で猫を勧めるの？

史弦は腕を組んで、哀れむように門珈を見た。

「あなたのクラス、あなた以外全員猫よ」

「なっ……！」

「しかも、猫の団長と幹部三人、全部七組に収まってるの。平和な学校生活を送りたいなら、猫入りは必須条件じゃない？」

むー、と唸り、唇を噛む門珈。

確かに、ここで猫にならなかつたら、異端視されそうだ。

でもここで猫になったとしたら、結局色々なものに屈したことになる。

それはもつと嫌だった。

「平和な学校生活を、望んでいないとすれば……？」

挑戦的な笑みを口元に浮かべてみる。

史弦はきょとんとした。

「なあに、あなた。鴉派なの？」

門珈はぶるんぶるんと首を横に振った。

「違う違う！あたしは他人に屈するのが大嫌いなの！」

史弦は呆気にとられた顔で門珈を暫く見つめる。それから小さく噴き出した。

「やったあんた！言ってることがアザウェイに似過ぎて困っちゃう！」

ぽかんとする門珈。

アザウェイって猫団長だっというあの？くだらないことが発端で一学年全部を巻き込む、聞いた限り馬鹿としか言えないような人間とあたしが『似過ぎ』だって？

「じ、冗談やめてよっ！」

かっとなって叫んだ。

でも史弦はまだ笑っている。

「あらあなた、もうアザウェイと会ったの？」

「いや、会ってないけどさ」

「なあんだ。じゃあそんなに怒ることないじゃない」

「だって、話聞いた限りじゃ、そのアザウェイって人馬鹿としか思えないんだもん」

頬を膨らませ、拗ねる門珈。

「ふふ、結構失礼なこと言うのねー。まあいいわ。それで、じゃああなたはどつしたいわけ？猫にならないのであれば、必然的に鴉に

なっちゃうけど」

そこが問題なんだよね、と門珈は顔をしかめてみせる。

「まあでも、そこら辺は仕方ないよね。暫く我慢してみせるよ」
「我慢して、どうするの？」

何だか史弦は随分と楽しそうである。
門珈はにかりと笑った。

「我慢して、東風族のリーダーになって、新派を作る」

言ってから、心の中で自嘲した。

あつれー？あたしってば、こーゆーことから足洗ったんじゃない
かったつけ？

でも不思議と、血が騒ぐんだよねっ。

史弦は呆れ顔だった。

「何だ、あなたも負けず劣らず馬鹿じゃない」

ばっさりと切って捨てられる。

まあ、確かに言われてみればそうなのかもしれない。いや、頭が
常人よりちよつと悪いのは自覚してるけどさ。

でも、と言って、史弦は不適な笑みを浮かべた。

「結構好きよ、そういう人」

「ほんとっ！？じゃあ仲間になる！？」

期待を込めて聞いた門珈だったが、

「それは却下」

またしても史弦はあっさり言葉を放つ。

「えー！？何でー！？」

肩を落とす門珈。

仲間第一号の予感だったのにい。

「いーじゃんいーじゃん。一緒に下克上しようよー」

簡単に言うじゃない、と史弦は苦笑する。

「ていうかね、個人的にはあなたみたいな人好きだけど、組織的に見たら、わたしあなたの敵よ」

「え！？史弦ってそんなに熱心な鴉団員なの！？」

「違うわ。わたしにしてみれば鴉も猫もあなたも同じ、排除すべき要素だってことよ」

予想以上に危険な言葉が出てきて、門珈は目を見張る。

「き、君意外に極道だねえ」

たじろぐ門珈に、はっ！？と眉を潜める史弦。

「ち、違うわっ！例えよ例え！物理的にやるわけじゃない！」

必死に否定する史弦を見て、門珈は妙に得心した。

そうか、普通だったなら例えに決まってるか。
昔のことを少し思い出し、門珈は反省した。

でもだとしたら、史弦は一体何を言いたいんだろう。

門珈の疑問が通じたのか、史弦は溜め息を吐いて説明を加えた。

「わたしは一学年の生徒会長。多分この学校で一番平和を望む者じゃないかしら」

「えーと、つまり？」

まだよくわかっていない門珈に、ああもう、と史弦は焦れったそうにする。

「だ、か、ら！平和を乱そうとするあなた達に抵抗する立場なの！
本当は！ゼブラのせこい戦略のせいで鴉の位置に収まってるけどね
！」

言って、はああああと息を吐く。

本当はあたしだってはじけたいけど、などと小さく呟いてもいた。

「ほえー。君も大変なんだねえ」

そう言つと、史弦はぐつと拳を握り、

「大変なのよ！」

と熱く言つた。

「でもさあ、ソラって人は、副会長なのに猫の幹部なんだよね？」

「あら、あなたソラ君のこと知ってるの？」

「うん、寮まで案内してもらった」

そういえば今日は、生徒会の副会長と会長コンビに会っているのか。偶然とはいえ、変なかんじだ。

「へえ。彼は良い人よ。付き合い上猫の幹部なんてやってるけど、生徒会の活動にも積極的に協力してくれるの」

上機嫌に言った史弦を、門珈はややげんなりした顔で見つめた。
ああこの人結構見る目ないんだな、と。

ソラが要注意人物だということくらい、さっき初めて会っただけの門珈にもわかるくらいなのに。

「ま、いいや。ねえ、猫の幹部の名前、教えてくれない？」

七組に幹部全てが揃っているというのだから、名前くらいは頭に入れておきたい。

史弦はいいわよ、と頷き、指折り数えながら言っていく。

「ソラ君でしょ、六日町五十鈴さんろくひまち いすずでしょ、あと漆・セクレティスしゅう……」

「こぼげはっ……!」

咳き込んだ。今日二度目だ。

史弦は不審そうな目でこちらを見ている。

「う、うるし……!」

我ながら、親の仇のような声だったと思う。

「知ってるの?」

門珈は大きく頷いた。

「うん、知ってる！知ってるんだけど！」

史弦は不思議そうな顔をしていたが、怪しすぎる門珈の態度に何かを感じたのか、それ以上何も言って来なかった。

しかしまさか漆が幹部だとは思わなかった。彼も、自分と同じで人の下につくような人間ではないと踏んでいたのだ。

いや、もしかしたら下についておいて影で色々やっているのかもしれない。うわ、超有り得る。ずる賢い漆のことだ。傍観者のふりして黒幕だったことは何度もある。

いや、それはまあいいとして。

「おんなじ……クラス……」

門珈は深くうなだれたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2815f/>

猫と鴉

2010年10月9日01時09分発行